

父恋

玉井洋子

原体験から追体験へ

母を見送り、父の五十年忌を終えた後、嬉野を訪ねた。嬉野は父正雄の終焉の地である。佐世保に住む知人の根回しで特別に閲覧を許された「旧嬉野海軍病院退院患者名簿」。その中にただ一行、父に関する記述があった。「昭和二十年八月一日 退院」理由欄には「死亡」と記されてある。私たち姉妹は臨終に立ちあうもののようにそれを囲んだ。

数知れない兵士や市井の人々が無惨な死を遂げていく中で、病院に収容されていたことを素直に喜びたかったのだがそれは、他人に語って共感の得られるものではなかった。誰一人戦後を無傷で生きた人はいなかった。阪神・淡路大震災直後、至るところで人々は自分の体験を街のそこかしこで繰り返し語ったものだった。未曾有の破壊を眼前に、押し殺した恐怖や不安が誰かに語るることによって少しずつ緩む。そこには傷ついたもの同志の慰藉があったし、ガレキの街ではそれが許容されてもいた。しかし、戦争体験については長く語られてこなかった。

「空襲・戦災を記録する会」が東京を皮切りに全国各地に出来はじめたのは、戦後25年も経ってからである。四半世紀ものあいだ人々はなぜ戦争を語ろうとしなかったのか。私が市民同友会の事務局に入った一九八一年当時、組織も君本さんも疲弊していた。それもそのはず「記録する会」は発足以来十年で相当な成果をあげている。

毎年恒例の3、17慰霊祭をはじめ、犠牲者名簿登録の呼びかけ、『神戸空襲体験記』発行。資料収集、慰霊碑の建立(兵庫区葉仙寺)、戦災資料室開設など、悲願としてきた数多の事業をほぼ成し遂げ一息ついたところだった。兵庫区の葉仙寺に建立された慰霊碑建設について君本氏から聞いたところによると、広く市民に呼びかけた百円募金はさほど集まらず、当時の神戸市長中井一夫氏によって建設資金の大半が賄われたとか。最前線でのこれらの活動を記録、編纂を仕切ってこられた事務局長にしてみれば何処にも記録されないその内実を誰かに伝えたかったのだろうと私は受け止めている。

中井氏は終戦直前に神戸市長に就任。戦後GHQと掛け合い市民の食料調達に奔走。神

戸の復興に尽力された方である。

市民同友会が開いたある集会で、中井氏がとりまきの人たちに「自衛隊は違憲です」と言いながら会場入りされた時の声を私は今も記憶している。その後、国際会館の入口で見かけた時には五、六人のきれいどころ(女性)に囲まれていらした。それが百歳になんなんとする白髪の小柄な好々爺中井一夫市長だった。三宮を歩いてこんな出会いができるKOBEはステキな街だなあと思った。こんな大物をも会員に擁し、自由と民主主義の理念に燃えてスタートした市民運動のたかまりも時代の趨勢とともに下火になり、記録する会の活動も、記録から伝承へと変わりつつあった。

さて、私の事務局での初仕事は神戸市立中央図書館に新しく設置された空襲戦災資料室の公開と発足十周年記念イベントのパネル展の準備。

空襲展一日目。子供を抱えたままの姿勢で黒焦げになっている母子の写真の前にはたくさんの人が足を止めた。大人は黙ったまま佇んでおり、一人の女の子が叫んだ。「かわいそうや！」。

空襲展二日目。三木谷君子さんからシラミの話聞いた。シラミは死体にはいつかず、人が死ぬとぞろぞろ退散しはじめるのだそうだ。シラミにどうして人の死が分かるのだろうか。ボランテイアのS君が言った。「ぬくもりや、人の血は温かいもんや」。千人針のくくりぼしがシラミの巣になるのでなるべく短くむすんだのだそうだ。

地獄の大輪田橋

シラミの話然り、神戸空襲の生き証人、三木谷君子さんとの出会いは強烈だった。出会った当時、三木谷さんは語り部として活動しながら君本さんのサポートをされていた。一九八二年夏、第十二回佐世保全国大会に初参加。「この道はいつか来た道」と会場前にかかげられた大きな垂れ幕が、ひたひたとしのびよるきなくさいものを暗示していた。講演は東京空襲を記録する会代表の早乙女勝元氏。早乙女さんは、青年の頃、母上に「なぜおとなたちは戦争に反対しなかったの」とたずねたところ「おまえ、反対するものなにも、あれよあれよという間に戦争になっちゃったんだよ」と答えられたという。

大会二日目、フィールドワークで上った弓張岳から臨む湾内の異様な光景に「軍艦！」と叫ぶ私に、「自衛隊よ」と耳打ちしてくれた三木谷さん。その目はものを知らぬにもほどがあるといったげだった。

その夜、彼女と相部屋となり、一湯上りにふと目にした彼女の足首に湯につかっても消えないゴムの跡を見て「えらいきつい靴下はいててんね」と何の気なしにたずねたところ「空襲の火傷のあとやん」とさりと返された。ことばをのんだ。生身が焼かれたのだ。

彼女は、昭和二十年三月十七日未明、神戸の西部を襲った米軍B 29による無差別爆撃で、全身大火傷を負いながら奇跡的に一命をとりとめた。その時身につけていたもんぺのゴムの凹凸が、そのまま生身にプリントされている。

着のみのまま兵庫運河にかかる大輪田橋まで逃げて爆風に吹き飛ばされ、意識を失い気づいた時には真反対の橋のたもとに飛ばされ赤ん坊がいなくなっていた。木と紙でできた日本の家屋はひとたまりもなく燃えた。水を求める人々がわれ先に飛び込んだ川もまた燃えたのだ。その時、彼女のお腹には小さ

ないのちが宿っていた。それがこの空襲で行方はずれになったお姉ちゃんを入れ替わるように生まれた政子さんである。三木谷さんが神戸新聞に投稿した「地獄の大輪田橋」の一文はメディアを動かし「神戸空襲を記録する会」発足の契機となった。

追体験すること

誰もが生きることには精一杯だった戦後のくらし。それは子供心にもひしひしと伝わってきた。甘えは許されないと納得しながらも、行商にかけた母の帰りをひとり待たさびしさは骨身にしみている。私は物言わぬ子になり、自分の周りに仮想敵をつくって身構えることを覚えた。

いびつに心をねじまげて歳を重ねてきてしまったが、本当はお父さんがいて、お母さんがいて、そこに子供たちがいて食卓を囲む。そんなありふれた幸せが一番大事なものだとも思う。それを心底求めているながら願いが成就しかかると、私はいたたまれなくなつてそこから逃げる。屈折した私の感情には形状記憶装置が組みこまれているかのように惨めだったかつての自分に戻ろうとする。私に

は成人してからも皆にお父さんがいることが不思議でならなかった。理性ではわかっているけれどもこころが納得していない。

被害者は加害者?!

詩人のたかとう匡子さんが事務局にいられて君本さんと話されるのを傍らで聞いていた時もそうだった。一緒に逃げていた妹の死をうたった詩集「ヨシコが燃えた」を出版してからお父さんが口を聞いてくれなくなっただという。のちに親しくお話するようになり、お父さんはお父さんで娘を空襲で死なせたことに負い目をもたれていたのだとお聞きして父は悲しいものだと悟った。

詩人、金子光晴が「赤紙」のきた息子を無理やり病気にさせ、徴兵をまぬがれたという詩「召集」を読んで、病弱だった私の父さえ日本の敗戦を予感しながら応召したのだから、いさぎよく息子を差し出すべきだと思うほど文学の何たるかもしらず自分の感情にまかせてしか本を読めない私は、空に向かって投げあげたボールがいつまでたっても戻ってこないような空虚を抱えて生きてきた自分ただ口悔しかった。

そう事あるごとに語ってきた私のホンネ

をいえば、「自分がないものはひとにもなくて当然」なのである。被害者は即、加害者である。こんな破壊衝動を秘めている私のところの中の闇。戦争の火種は私の中にある。ここを意識化しなければ、負の連鎖はとまらない。私には空襲体験はないが、三木谷君子さん親子に出会ったことが私の原体験であり追体験である。

さらに、二〇一一年第41回全国連絡会議大牟田大会に中田政子、石野早苗、米倉澄子、八田慎一さんたちと参加した時のこと。懇親会の席で厚生労働省援護局に申請すると、軍歴証明書を手に入れられることを知り帰し書類をそろえ申請すると一か月ほどで返信が来た。送られてきた筆文字の資料によると、出征してわずか八か月で海軍から陸軍へと移籍され最期は嬉野の海軍病院に収容されている。もともとの胃弱に加え慢性腸炎、座骨神経痛などを患い最後は肺炎で亡くなったことが記載されている。たとえ父が八月十五日まであと二週間生きのびて除隊されたとしても、とても生きて私たちの元に戻れはしなかっただろう。しかも、死後、一兵卒から一階級特進してい

る。何たることか。姉たちに父の最後の様子を知らせると三人の姉たちは皆泣いたが私に涙はなかった。そればかりか妙に腹立たしくて、もつと勇敢に戦って死んでほしかったと思ったのだった。

父が出征した昭和二十年、私は四歳で、顔も覚えていない娘が、齢七十歳にしてようやくたずねあてた父を鞭うつ。みじめでさみしい被害者であった幼児は、成人し、世の中の父親という存在を憎み、刀尽き矢折れ満身創痍で斃れた父を激しく打擲する加害者となっていた。

この時はまだ、私にとって死は観念でしかなかった。

実際、ロシアがウクライナに侵攻し、ミサイルが撃ち込まれ、街並みが無残に破壊され、無辜のひとたちがむざむざ殺されていく。この戦争を誰かためて、とただ見てだけの私たちは、あれよあれよという間に戦争になってしまったんだよ、と言われた早乙女勝元氏のお母さんと変わらないのではないか。硬くて冷たくてでっかい戦車に乗って前線で戦う兵士も人なのに、戦果は誇大に被害は過少に流される。フェイク

ニュースの在り様は大日本帝国の大本営発表とかわらない。にんげんを戦争の道具にしないでください。話し合いでなんとかありませんか。プーチンさん。ロシアに冬でも凍らない不凍湖があればねえ。

戦争の時代を生きねばならなかった父母の年齢をはるかにこえて、自身の身じまいを考える年ごろになって、しきりに父母に詫びたいと思う。そして、今日こうして生かされていることを当たり前には思えなくなっている。

追悼 中田政子さん

忘れもしない。1995、3、17。阪神大震災直後の交通事情もままならないなか、代替バスを乗り次いでいつもの慰霊祭と変わらぬくらいの人が葉仙寺に集まった。自身も大きな手術を受けた直後というからで奔走してくれた中田政子さん。

病気療養中の君本さんにかわり、世話人は中田政子を代表に推し後事を託した。阪神・淡路大震災以前に市側から提案されていた平和祈念館構想も中央図書館の資料室も震災で撤退を余儀なくされ、明日がみ

えなくなるなかで彼女は辛抱強く問題解決にあたっていった。

語り部としての学校訪問に加え、平和学習の拠点としての慰霊碑構想の実現にむけても動きはじめた。らちのあかない市との折衝に皆が席をたちかけても彼女は立たなかった。ここで私が諦めたら記録する会はどうなると毅然と新代表の覚悟を示した。会発起人の市議に市長との直談判の交渉を試みようという話がもちあがった直後、膠着状態だった交渉は急転回。大倉山公園の東角の一角を無償貸与の通達が届いた。

なんでも空襲体験者の矢田達夫市長が断を下されたというのを仄聞したが、であれば私たちは何のために、長年市役所に足を運んだのだろう。募る憤懣はさておき、話は加速度的にすすみ、ついに命名された「神戸空襲を忘れない いのちと平和の碑」。1752人の氏名が刻銘された碑の裏面にはその何倍もの余白が残されている。八千人を超すともいわれる神戸空襲・戦災犠牲者を追加刻銘するための空白である。碑の建設費用は真正銘市民募金によって賄われたことを、ここに明記しておきたい。

2000年七月。神戸で開かれた第33回全国大会。この時こんなに元気だった中田さん（写真中央）が昨年急逝され、今年（2022年）6月23日に偲ぶ会が営まれた。早すぎる逝去。お別れに私は、「地球が安心して暮らせる星になるまで私たちをお見守りください」と、お願いをした。



（写真右端は記録する会発足のそもそもの仕掛け人の一人、神戸新聞記者の光森史孝氏）